

追悼 福井勝義先生

書かれなかった原稿

— 福井勝義先生と革命前後の新聞 —

増田 研

本学会設立に尽力され、第2代会長でもあった福井勝義先生が、2008年4月末、永眠された。偉大なリーダーを失った喪失感があるのはもとより、個人的には常に激励してくれた父親のような存在を失った悲しみのほうが大きいかも知れない。

だがここではJANESニューズレター編集委員として、福井先生に書いていただくはずだった原稿について短く報告するに留めたい。

私は2007年4月にニューズレター編集担当幹事に就任したが、これはちょうど福井先生が京都大学を定年退職されたタイミングであった。ニューズレターの編集作業はまず、春先、学術大会の頃に企画を立てることから始まる。この年に発足した編集委員会では福井先生にニューズレター17号のJANESフォーラムに執筆してもらうことで合意を得た。

理由はふたつあった。ひとつは福井先生ご自身が執筆に意欲を見せていたこと。そして、職場やさまざまな役職を離れた福井先生に、新しい出発の姿を見せてほしかったこと。このふたつである。

私は執筆依頼の電話をかけ、福井先生は快諾してくださった。

「荷物を整理したら、昔のエチオピアの新聞がたくさん出てきちゃってね……」というところから始まり、革命前後に買い集めていたエチオピアン・ヘラルド紙の記事を追って、その当時のことを考え直したいとの構想を打ち明けられた。福井先生のお話をうかがううちに、これは一回では終わらないな、連載にすべきだろうか、との考えがよぎったこともあった。

福井先生は原稿が遅いことで有名だったが、一度取りかかると驚くべき集中力を示されたという。

その集中力に賭けてみるのも悪くないと思った。

その後、私と福井先生は1年あまりにわたって何度も電話で打ち合わせをした。時には私のほうから原稿の催促をし、時には福井先生から原稿の構想について相談を受けた。福井先生がメールよりも電話でのやり取りを好んだことは衆目の一致するところである。

最後の電話は3月10日だった。外出中の私のケータイにかかってきた電話で、福井先生はポツポツと原稿を書き始めているというようなことをおっしゃっていた。「すぐに原稿をもらうのはムリだけど、弘前の学会で催促しよう」と私は思った。

その弘前での学会に福井先生が姿を見せなかったことは、みなさんご存じの通りである。

本来ならJANESニューズレター17号のページを埋めていたであろう原稿、ひょっとするとこの18号にも書かれていたかもしれない原稿がどのようなものであったのか、今となっては知る由もない。

1960年代末から70年代にかけての、帝政が末期的な症状を呈し、ハイレ＝セラシエが退位して、軍事政権が発足する頃までの新聞の束は、いまでも福井先生のご自宅に保管されている。

(ますだ・けん/長崎大学)